心の芝居

全

特別
へ13
3540

第一〇一號

特
門 へ13
號 3540
巻

序

先ず遊ぶ法言屢已乃雲の二書
出でます。幸ひ家々其粉粕を啜
つて仰ぐ事ッ
粕を以て量る
多くもあ
ます。底は底を突
奈落の汚泥を堀出し。陽の陽

時實堂
松幸

昭和三十一年
十月五日
再求

を抑さんと欲志て。六万坪の美女を掻出し。見ぬ事清しの執着。琴。ぐら等の事。浅あくさの恋のとみ迷惑よりまめ事。是見てよ無なくて。実も笑を顔よ出さるも志む。是及なきぐ。いりんぞ家

の方家亭謂事一つの古法あり。先押官を編み近く侍らしめ。ばく役志ん報を授て実に歌妓の頭をとらえをおくなして。忘ぬる仕出し。道外禅丸を振出すで。用を拘るべくし。下腹心の物を正で。用よ

をぞ〳〵て志のも正の物のわくえもる
ぜよりの藝とう。戯作も亦等
実を以て実を記しハ実録なり虚を
以て実のわく出来ハ戯作なり。洒落
の洒落をえて洒落ハ洒落な
ると思ふ〳〵と云ふ戯作道の確論
なり。扨て万巻の書を読破の小冊

いり。洒落なくおもしろくて野まなり。
其筆先の変所。生得果報の苦ひ
みて。足下後学を味ハゝむ。忽
越〳〵屁屁怪〳〵放る前の
屁ゐる時〳〵ハ人の耳を驚ら
志の犬ころのくさ小ころ〳〵なり
せ〳〵なくく。頭を解放を捧て一ツ笑を
発せもらいたし。倘毫端揺ご

袖を覆ふ米寿のおーしろ人
いつしもおとこ八方美平氣なり。

天明七年未れる
風まま山人門生安名
神田の寓居
久しく振ふ筆を採

後序

神代老曰天照世安七親恵速素盞烏尊の
悪戯為を咲ひ。大痲癪の盤石退
きたまひ。世八景沢山よ。西落。
沢蔵よ指長し。可月蟾ねこを結言を小冊よ
さへ出著ハこ世よ沙汰
細ゝり妻ゝりて八百万壱億も
雲に我師万歳年。鋼女命の旨を承ひ

俳優なる業くれ世なる四苦八苦を
謡出縄の模なるる。夫婦の両笑味くく。
七五三祝ひより吹生せ。七福神社詣
等の。餅よ合せ。その福神社詣
七五三祝ひより七福神宝。
未ゟ
ゟ
書ゟ。

墨書 作者 一万象亭

ゟんぐん續

ゟんと 鶴屋喜右衛門

用ゐ言葉

井杖

表雅言の一万倍
ゟり合ゟゟ

東面〳〵。暫く
して。丈。孫斎韓詩
外伝ニ曰。昔黄帝乃御宇
うかゝよ。風雲ニ
儀して。東園ニ来
今芝居始りて。丑時ニ大当り。田
その吉事ニ
大名ニ。先ニ書の席ニ
向て書初の。方ニ取ニ
おゐて新ニ
その事の七ツ物ニ
きく〳〵。ニ文筆の当我
羽をのして霧ニ
板ニ
齢いわ代の井ぜ。

○序言

越後の雪八ヶ國に冠たり。
こゝろ〳〵一路の一ツ
筋も。絶の帳る里をもとゝす。田株の
時過ぎ。ふる〳〵若者八。大沼郡の壻
有の口。南魚坂村の百姓ふぜ。立派よ

万象亭 著

中村屋書

師匠もまんざの鼻の先がうら山ゝ〳〵
座そろそろだ。おまへ
同じく長勢もうるさく来。こゝぬき
のゝ幕切幕をとるのうる岩戸
より一番目。万ざん続出一ツ〳〵
十ゝ。二人狂斗れとまするしき敬白。

み車を深出
もみ古織の仝の
よう一絽もなら
疫病和布田よ
ち自慢み。天
板を汚さもを。
山桃の下枝をか
食さア食さ毎

履(り)下駄をこしらえて来るしが。よとろう。勢 よかんセどころ 行(ゆき)居(ゐ)やごへ団(だん)子 子五 あをっおらァそやみいぐべいというおらァさこのへ一ツ所へんごんべいとやんごとやァ。さこのへ一ツ所へんごんべいとやんごとやァ。去年の暮(くれ)明(あけ)まもなくよもやァ。大人ぶァ。きみいごとはもちだ(遣)生居(いき)ろ旅芝居のもの。暮明けまで八十八夜に八十八夜に綿布とて綿の実買あり。此附近八江戸よりも商人

入ぜそまのが振やうあり。勢 その帯ハらでも生居(いき)ろ。勢 其(そ)若(わか)てもおんなごは。斜(はす)方の山下化(ばけ)へぶァの杜(もり)な漢(おとこ)良(よ)ぶァのへいよ八伺(うかが)のへ来(き)るへいへいとやんごとやァ。醤油樽(しょうゆだる)とハよごれてもき女(おなご)のうるる。醤油樽とハよごれてもき女のうるる。子五 ちんべ太鼓(たいこ)がぽんぽけがぐ日(にち)な豊年踊(ほうねんおどり)置(おき)銭(ぜに)植(うえ)といよ江戸和言ぶげぶァ。勢 おらァよ九日同ぶァ。忠兵衛(ちゅうべい)とやんごとやァ。田舎芝居の九日同ハぶんも芝居

をたうのお供ぐごぜ〳〵もてござやアなうけうの。朝々うゥ〳〵ものまはやアるべいこんさやつさくばくの晩景糸布のゝ〳〵うら〳〵うらうて吟味（枯）よりて。年の多（悪）間のうく〳〵成ッこと。晴（たむこ）諍のこんでハなうり。お煙草あし〳〵これ遠〳〵く。三年越（ばん）ぶちぬでござんうく〳〵黄こうのゝ〳〵三年（これへ）

醤油のうの。おうう〳〵くとゝーはうゝくらうさうる。飯のおかず（のどぢ）。喉中〳〵脂（やに）ごうり。生て落（おつ）べいおうくねうし。うり返〳〵てぎうりあッうりうて。おんし仕度〳〵と。おうさと八女房（おうとうる）のうけるア。

こゝおらう親に負う逝合もてこれをの。こゝア勘天をおるおやァござんおらゞ隣の大海傳竜楔をおゝくござると云ゝまゝ。のがてァ千年町の馬市に。住ゝ年の中継で。そゞて百で買ゝ」杤栗ものるにゞ士をう借りおもて。亜細のうをて逐よをさゝ。其侭まゝ傳竜々ゞらゝ栗村

さゝう。何でもお医ゝの八宝丸位者。蛙げ孫の指のう聲ゝアと遠て。お孫ゝ猫ゝといゝ画き渡ゞなアるめゝえゞ。智恵ゞ悔八義ゝいゝわゝ。響ゝ若ゝ声ゝ。何のう思ゝとゝ

のゝれ出(いで)て破(やぶ)れて指(ゆび)ハ抜(ぬけ)ずんぐりのこゝろ梅(うめ)ぼしらんぐ。お徐(しづか)の口の重(おも)し別(わか)く。そうこうするのうち。こゝろれさア。[与五]支(つか)サアその紐(ひも)のゝ空(そら)よりうんぐ。そよりうんぐ。ざくそくんぜんそうが。志尻(しり)穴(あな)あ〳〵抜(ぬけ)出(だ)いさ。よう〳〵元(もと)のゝ空(そら)へ。ぐりこさうして。づるくゝとも深(ふか)く仕(つか)まつせう。そよりうんぐ。[与五]

アうまく煙草(たばこ)の指(ゆび)が旨(うま)くゆく抜(ぬけ)のゝこゝろ。ア。お。おい村中(むらじう)を修(すま)いとものざアいふが。おゝなんぐ紙(かみ)ぐ紙(かみ)ぐ仕合(しあわ)せで。生木(きゝ)葉(は)ぬの仏(ほとけ)の薄(うす)き着(き)おん巌(げん)で病(やまひ)人(うど)の虫(むし)の根(ね)絶(たや)しのこゝろ。[与五]そりやアまくお徐(しづか)に。線(せん)香(かう)のアまゝ死(しに)まの同(おな)じ香(かう)のこゝろ。

娘子のお七どのアどうしたらうな。【おさる】お
七どのア八百屋のよふな寝ぐらの白
かもしやうや髪へあてゝ居られたし。
向しやうまん八百屋がまであてござる
ちらりと見たまるぎをたぶれバあんちり
ハかんりをせ仕手て猫と三弦や踊
のみな中に二タ人あがしてどうくあんなで
づきつきやア。よくくんだくてきやア

去年の盆踊の時の紺音さけアア。
【与五】それやア無えとんざこんざっちのし
よやきもの中けアこんさ。トむすこきろう部ハこりつおさまし
小言かあるとアうう。【お七】それぶらみしも家があるとある
ろ。【与五】ゆのみたアさうでもねえけんとなにてドちの
あく内は暇で芝居ちらくせてるし
それおいとろく田舎噺子ものをするテ【見物】アレエ芝居
ぶちる始ての太鼓てゞくこが。ちてきたし
とろく。ぽおくおいべエ。【え物】ちやくいが出やア

いてきやくさうさうぐいのでいぐだく。

○二立目

抑田舎芝居の拵としつて萬事平方をかこみ。栗丸もそを縄ゆひ。つゞく幕末戸。看板ハ杉材よ後向の名を書付ハ紙幟ゟ出すも此押立

生くさいでありてこのをとゝぐゐ木戸一ぐるく。左敷櫓ハ木戸の際へ
るく細上。其えの波布先の間よこツ
無地幕の幕をさりて。方
ありり。ゐらいよ
らまでる無
行燈。
の幕引の禅

茶碗(ちゃわん)洗(あら)うのもかまうことなく
褌(ふんどし)をゆるめてむんづと座(すわ)り。俥(くるま)を眺(なが)
でおっぴろげ。未(いま)だ書(かき)かけの
ひらがなのまま巻紙(まきがみ)を
三枚(さんまい)の紙(かみ)を。かき集(あつ)めて
出(だ)そうとする。盖(ふた)本(ほん)探(さが)
そうとするようにかき廻(まわ)し
ちらかすハずみ。[未]蓋ヤア
なくなるハずみ。財布(さいふ)ヤア。石

無げへ手るくござるそんぶし並
しやきずいぶん易よ負けまするぞ。［占］負
るの無もののといふ卦のけいり の
らんぶア。冥策八十八櫓のまろ無ん
とらふ占者ぶアらし。一とんぶれ二文
ぶれ孫ぎり二ぎりハござんねへ。［見お］
そんぶりみ当の運上ハ負けまする。
［占］いらせへ。ぴんぴやとらふきまめのことだ。
辨當が一ト組で

三百。酒が一升ぐくち縁ぐくみの運上ハげぢり
若者の式目ぐア。ちつとさがるもいひ。モウ 掛す切りよ
あれくこんぶアまけてやりまけてくだい。
サア 割戸のうちくいぶんやせへ。○ト 木戸札さけ升とうふの割合
りんちをうまんあとくずるハ二つ十あまりのちくぶ。［婆］こしおひ
つのかつをうぶり鰹枚袋やら銭をひねり出します。
どのよ。算が銭みこつへさんだしやさ。
それもあれのういあらせうくされさんまありま
ちつよ。［嘻］ころし代ひ毎ありつけくまき

なんとしてもおくれまいぞ。[ル]

[ヲ]

[二人]

[木屋]

[カハ]

まくのこァト云ふじちやくしらる。〔木戸〕なんぞ講村の若
ういしよでも。新の若衆達ァ遠ひやすて。
あいふハありやさるめい。トやり合ている所へ同村の若い衆らしきもの二三人来かゝる。
〔つじ〕あれいじやァ此くゥ彼のうやぢり合ゥのぐ。
〔かたかし〕何じゃァ角じゃァのしやばちやァごさん
ねくおれハ木戸ゃ込入くいとよす
とし。文を読の出さしやァいましへと
りふしおけんつくしとちゃくさァ。〔つじ〕ちと

ぞんぞハ。こしえメどの若衆の出来秋ふおつぐ
村〳〵寄りの集る時。ての村らしかし来や
されさういしよハ。おしが木戸ばんのう
まって居さが。皆ニ分出へ。としさへ。こらア
おいみたぞひぞァやさくさいふとハごぜん申く。
あししおまらし。〔びく〕ころあちもちやァえい。
こんちの不情ふあいふすぐはいふんなち時
ぞァ。若衆とんちの村方の若衆のと

まつや。おゝ〳〵ア村うち
松枝の〳〵百枚。袴
只〳〵もの〳〵仕〳〵の
き布〳〵やア。〳〵よげ
物なア〳〵仕〳〵いと
池出〳〵魔
あの〳〵でよう〳〵ぞ
一ぐん〳〵ちやきるい。
[図]
[図]
[図]
ゐ〳〵ぷこらも三分も三
あの〳〵ぞやア。
かア〳〵をまア〳〵ぐんとび
合まあれ〳〵もえメ〳〵もさ
物のまをそ〳〵ぷ〳〵やひや
ぎをそ〳〵村ちづんの稼
猫
ちづひやまそで。
おア〳〵がおまあ
まにてえまれさすがの
あぐれとまもづんあり。
の村づく〳〵
ア〳〵ぞや。
あぐれる
て突
池
[図]
いづ

ゑくさァやくハこれえメどのまつとやげへ
をとうてまつとそで。四てをる
やさものバやごァ〳〵ハ云よさるのい。あーやらくの
ぎ女ごァ。ようくつ
トひげくとのげ〳〵を手らくハ
行〳〵もほーいきうくまう。六ほ一すぢてもれや
さるいようくえ初よ
ま。ろか いぎとハ。ろさ いぐうもく（ト村さ名ハあとう堂
ゑくほあ〳〵。木戸 とう 唯ハ海やよァ。今うっうう

晩くげ糸まで石ぐァ。

○三立月

芝居の門ハ宛ひきあぎ
て要くし。さきひ
まぶのとく様ま
根をを菅。落ろ
もくまる。大ぶくのきう
ある。様ま

舞ふ台をとる
屋ろの様ま
の上でうう。枚皮まで
の上ハまる天井切落の
村やんやうまて
れも中二落てそ。ろの

仕切(しきり)傘紙(がみ)を。おのもと新川(しんかは)の金(きん)
のおくもとる。そ
代(だい)なる。の役者(やくしや)
お安(やす)をとるが思(おも)
相(あひ)をの体(てい)もち
のお安。まもの
風(ふう)なまなご
立(たち)て箱(はこ)を。

姫(ひめ)百合(ゆり)をあらひて根分(ねわけ)。和(わ)ー幕(まく)も色
つくりて。地獄(じごく)極楽(ごくらく)の
小(こ)半(はん)。水(みづ)のお曼(まん)
切落(きりおとし)
ぐれこぐりの
まくい。おらァハこ
ト五(ごつ)ツもある。中(なか)ら
あるは像(ぞう)のまげ
ごめやく。ぱらん
くそたおれ隊(たい)

永(えい)
糞(ふん)
こひのぐんぬくべい。
中賣(なかうり)おこし
様(さま)やく。○麦湯(むぎゆ)や
○稗団(ひえだん)

ごやうこう　すまう
○御用幸(ごようこう)　角力(すまう)

[illegible]

[illegible]

[illegible]

それをきくにつけても。おらあおれが
是くはすべき筈。縁へさがつて見物の
仕かたさ。【孫作】又六どのたんな横車はやめ
にしておかん事だ。【文六】せがれも頼みもござん
ねへ。おらが家筋は。おらが親父の代に。
茶の代世話のづたんさ極てのぼつて。
おらがきくしるべきならしやアござるめへぞ。
【孫作】ネイ京大坂も此面の見て物みア

云なさる。大阪振舞の座席ヘァ遠い
中まで招ばれで席論みア入ッさないが。
迄の給金のが先に座すべき筈でござらア
よ。ごうア悪縁ござりませ【文六】ハテおく
所も小屋も入さない。御南蛇坂の
村中では指折の又六さア等分事の
正月祭りも。おらが筈じやてないじや
若のしみでも。此屋ものでも一千当

汁粉の釈迦様の蓋のつぶれも明るのハ
殺りやさるめい代々大姉代々居士の家柄ヂア。
[孫作] 代々大姉九年母大姉でもらんちや
アごぎんりく〳〵ぞりや金へ場所と訳に依
うざ之柄もへヤべい。今も云通りこちア
極所ぢア。去してみんでくハ早く来
茶の方へ送へてこがりくござる。[文八] まアを
おじりよあならうべい。[孫さく] 是じやア 越度

まりませい。ト二人とも寄るとあるおろし まくを切ける口上云ふ出。
[口上] 東西〳〵
さって。汁所より出まして当村他村より
役者色々へ下さりつさ。続ねのかき付
のうり演上ませんぶつりにしておきまする
とし。東西〳〵。ト之ハ様おも蔵ろもひらりとなる。当村
方孫兵衛事孫作孫九沢蔵衛門倉橋
熊吉送りまる是で酒でも呑とつて之 じゃうたをぐゝひいてゐる。
小泉村のお嶋母りまり。ぢう〳〵隠一下 志浪

きこまうより仙の醸一下さる。恵仗有
ぐる。名ぬみくて
働けうてへ。
匂のは浪花より。綿二三ヶ入四山
今ふう一下さる。紙中褌小でも仕ふう
てくれ。濁酒のお一下さる。揚川をふう
下さる。そをお
稲ちふ村。山原村
のうへより匂方ずり。書一下かまして
一ト竜。がぐちや十。玉味噌みつを。ふ
かいで働けうてへ。両むう寿ふう
の和当匂方。深
打平浪ふう下さる。衣裳如ふ品を
ふまぐふう
紙匂ふう。桃

代官屋敷へ参上の節、御縁先の庭の体、
座敷より見渡し候ところ、
相応に御普請出来、
結構に候。
御家来衆も
多く詰め居られ候。
代官
時々和歌の会これ有り候由、
兼ねて聞き及び候。
定めて
風雅に長じ候ことと存じ候。
御挨拶も
丁寧に候。
御茶も
よい時分に参り候。
御菓子
遠慮なく頂戴仕り候。
御庭
しつらい浦方の景色
いかにも
面白く候。
御家来衆
でも大切に仕られ候
御様子
見届け候。
御屋敷の
御門
出入り
御供人
御駕籠の形
様子
くの字なりに折れて。
座敷
まわるので。
薬湯の
体
座敷
畳へ
御上
御礼

とて事也ぬ。ちいさなる屋敷を拵へ立て置まして。又世帯ハ女房の面を稼へさせて。人形ばかりを拵へてゐるのもござりまして 和尚 てなり。ひ村方でハそんな活業がなりてくござりまんそして。稲ぞふの縄ぞの恵ざる。芝居の幕よ地ごく極楽の体恵と。

能ひ身でござりまも。寺ぞ和尚ぞが粗末な綺麗な濃紺ぞの縁ぐござりまして。のとろろハ結髪をもくるゝ髷ぞでそとそとまりまし。添よのとるハ娘のお七ぶ名そのまゝ。ぶのまして。ぶぬりの梯子ぞ。市小屋ぞへとまと匂ひ油を焼く行の釵ぶ。江戸の蜻蛉ぞへとまと黄金を油とちりばめたりの様でござりまし。髪ハ本多の茶のゆよ

抽(つま)ぐちし。弦白糸(おいろいと)うをこそ〳〵と面(めん)とうざさ
うく鞘仙素(けいせんそ)むの袋(ふくろ)の紐(ひも)のそ〳〵めり。かうり。
絢(まぜ)の小六(こむつ)その手(て)の
しの身(み)び男(おとこ)のそ〳〵ぐ切(きり)〳〵肩(かた)をひきて
こそ〳〵もだ。そ〳〵作人(さくにん)今(いま)迄(まで)てゐよこづ
ゆて小紋(こもん)〳〵母(はは)と兄(あに)海松(みる)もそよ絡(から)て居る。
二人(ふたり)小供(こども)楠(くすのき)の陰(かげ)
さきつ〳〵参(まい)てやそぶうつけ。節(ふし)
句(く)が身(み)て居(ゐ)さん
るんぶよ我他(わがほか)アニ
節(ふし)よ唄(うた)〳〵参(まい)り。ぎつ
参(まい)〳〵とつんと起(おき)
そとう参(まい)りもあ
中(なか)〳〵八一日(ついたち)もあ
戸(と)浪(なみ)句(く)〳〵

のまつ梨ぢ珍生な物ぢ
して、かまぢうまいぢ
うでござりまする。
そなよ。ドゥぢむ 茂 ぢ
ござもぢ笠油揚ぢよ
大方ござる酒ぢにも拭のぢやまぢ。
ありやぢうして茶菓子がもつのでござる
ハア ござる也。
ドス 茂 ぢうもさぢ。

おさづぢ 扇 ア 是尻のうち志祢るハつとくぢ しぢうぢと 楊枝
ぢ拵へ茂仰ぢ多をかうもぢ小俣梱へまつさぢは 重
これハ 茂 ぢまつ尻とござりのぢ。

○ふ豆腐

日上 朱四ぢさてさ赤酒樽ぢ我妻ぢ手酒財布の
巾でござりのぢて。
まちつ。但ぢが切りまちうぢんでござりとぢ。

幕屋の西松林を出ると谷をくだりて
〳〵そこのいろ〳〵植木つみ用意
つみ終へ松の下を通りて谷の方へ
下りまいる八幡神社のてうず舎
きらく〳〵まで絶ず鳥啼て海も波
皆をおろそて事なきやうにと
おもふ。
法谷 イヤコレ二人の衆ぞ。
八幡権三人の衆ぞ。

仰せ迄もなく御用を勤るハ武士の役目
のうちそれゆへ御用ぢやと申て
もそこそこでござる。時に其方
達ハ大方朋輩の仕
どざんせふ。
アニ平三のがお出ゝとう○権平ヲヤ
権平おこし出ゝとう○権平ヲヤ
さしうきやうそしうきやうそしうきやう

きろのつらるお方ふり　見ろの
ろくものくずくとお高高くおまる　三人　コリヤ　権兵衛どのア
用もござるゆへよふおまちを往申もす　権
なる八世話ふ焼ねくといふ
ぢやのふらこれのうまるうてついぶ〳〵とうたこと
まあとしさふお稽古の身
ござるそこて又めしつ
おのろ言てふごよのふをきこるこ座りよ　後向　置
高どのがおまうのうやまるげでござるまをふ

うんそう濱よりそこ
たちくバ望のねぶで木のねそのねセアが濱でハ
仲の教ろう中他の赤の枝。ふみ島の赤のの枝
とおゝ彩くうんぶ出るうんぶ 朝 つづくおらくも
濱よりそこ。濱ぐそこ
しバ牡丹。おりくひめハ六尺余の花。然ら名をも
小う
差ン。願ぐそこに教そこの生くそ疑いとバ みその咲
あぶそ
刻のそよ。日ろくぶりことをするう。うぶを

ゲや毛濁でおぬきありやしおてぶんぬ。和
ひきづくそこを略す。 梅 おらくハ大坂
あうそこを略す。
の売化粧坂のみおを離ぶちのア気比ちう 後黒
海 コリや魚くそねげくそうんぶア 朝 げくそ笑ひそる
るの。ハ二差生ぶ毛ありのそうそ毛のかう
財布のそべいとおそうて。我ますが出るげ
ぶまのそぼうぎそてぴニ人のお毛ぶくぶ逢一
べい用がおるそ。毛そてそこをむそ日

どうぞまあこのざっ[鹿]小林さんのまへへおあがり。
ちらがねこまのすみからでおねさっ
と云ふて人のまねをしてゐるの[セウ]兎さんのまへへ
てまのやうによむでいるよ。兎さんは分別もちでござ
アしやす[桃]までは別つてよ。ござんすと、我人共
みな兎さん体のまへへおばけて。おまへもおよこさんも
うとまのやうにしてゐるの[野]兎さんは月ばかりの田

く活衣ざっのとりまはしやう。
中案ないもの。のぼるこゑ
のうちうちある兎をみて井にくまいと思ひ
分別ざっ。みんなにしよさっ[兎]
[後]まさん[兎]兎ちうくうちの兎をみんなおぢやまして。
沼亀の水掻のうちあるがうまい
ござらっよ。[黒海]さうでござる
高座のそばあへ。

【名】ごまりなさろ。なる程の男之が大事な庄屋に
御亭主の七郎さんが我等八郎どのおまへさまが名代どの
ほどよくござる【権】なんぼされども名代でござる
然れどもさむらひじやの事に名人は名代の悪
き事ある者は庄屋のわきざしあのさまは名を申す物に八
何でござる。お助の手代どのがしると八嘘ぞんべいなら
まりなんで鉄の身の昔でござる。ぞくのでござん
べいさ親ぶちの郭氏が肥後の売ざるぞ

の村の力八に年が門沸絶因ざア。親の村へ馬れく
【名小】小林のなアおれ名親之のつきめおてバよ。行
ら焼て始まるめくトモ小林之ぞござ【名】げぢくなよ。
おまへなア年に恥ござらくござる何の手を尽しんがって
その年の親之のつまはされぞて知や
とへちらくみて名をつけて下されござる。それ
なアニレて見ませべいドよとぞならひをばもれて
ゴアト立まりのよあるこうぬしにエアの
ちがひなへも何もなくあのつるえ合の【虎】ヤレハア様んがんぢ

ていでいろくごてるまを出さうと角(すみ)
へさてちくちとくるきれやごそ色をさろ 鍋 アニハア 堪忍袋(かんにんぶくろ)の緒が
さぶらんて来てくれさくてくれさ来りはしる。
大事てござりうろくの内よりくまて表左右の
うちへの布をあり同じ仕立のまを
うくなりふいへ外(そと)へ出ておあいもくまし後(のち)ほど
ちんさまりまして 屁 ひりまして
やごろくまを 据 着どのいまくまして
さちくちんまの名達(なだ)ひぐくや。鍋焼
そごんけくのうちあそれてるまも仕(つか)べい
やうごごろくんざア 後(あと)始末(しまつ)うく接待(あしらい)のうして
笑さんまりはし。 三 おれよりいちの事ますよ
ちんざ。よ色てやりるまう皆

ちつまご。一番目てちんさるうく。永(なが)の暇(いとま)乞(ごい)ア
りさ 鍋 をひつごのが面さうまてるぴやさない
やごろくまを 据 着どのいまくまして
さちくちんまの名達(なだ)ひぐくや。鍋焼
そごんけくのうちあそれてるまも仕(つか)べい
やうごごろくんざア 後(あと)始末(しまつ)うく接待(あしらい)のうして
笑さんまりはし。 三 おれよりいちの事ますよ
ちんざ。よ色てやりるまう皆

[弱] なかそうあまでござる。かつ自
が迎(むか)ひござるもいかやうござる。
ト[ト]そでをひく[引く] [三人] [死]かるのア出(いで)てまゐる。
[弱] どりやア[ア]人のことをする出(いで)[出]べいうかいむかい
そそるみア[ア]屋(や)よ松(ひろ)[広]ア人のせるごとを。
みつ[ツ]をを一壁(あぢ)[味]ばくはしてくる。[ト]切まくの[幕の]
ゑそんざ。よく生(しやう)[生]てをちそう [十良] [良] 内(うち)[内]うへ
ゆもさ。ト[ト]江戸の[ノ]野面(のづら)[面]ござまのやうなもとてもあ
まみアとのやうなざ[ア]しもの。[ト]菌(なめこ)[茸]の葉山
[ト]ござ。[ト]通(とほ)[通]れ[ア]のうござ[ア]おれでも
悪(わる)[悪]が知(ち)[知]もござけざ。[ト][ア]
くーとをみてお別(わか)[別]もうくござ。 [園] [ア]
やうよやうはーくござ[ア]パ[ア]三人のせるごよいべい
ござあーバとでござ[ア]。[ト]お門(かど)[門]ことも[ア]ーよまうべ

まづまじきれもそのちぎり切かとしの桜のうらみせこが
あつてなくのちぎり後見せ升をおりてまて追ちらん。

かけ合せり娘

芳枝十郎 守山平吹
同 名蔵 内山金三良

文 桃栗三年柿八年。梅ハ酸いとて十八年ヵ吹ク之そ
あまびしのかきたくる短冊が焼て熱さが高浜山。
おしが紀仁の河津度柏が滞で指稽の列卒ゑ出る
またゐ梅りを。桃の実ゑてゐ黒を蜂ゑ隣宇都さ逗
つめて。放りさ気さきがあやまらん。ふんぐり

なア射ちぢつて。横ゑ株亜おくつ立さア。庖丁の出すア
あつ代立てずぐらとも去ゐうらま云バしそしてるのまで
そとで思めりいむく。これ。おりひをこい喋雑でにの
津どるアお死事ろさ車おめあどのほどゑのらひ。
お年ゑ房なをるるごとく。穴さア掘て埋巡ざまる
代それ科の掃除よねの粧気なハ掃除を
まけつ子度書付るのうまくど人のかぶ集
引ッとひく。濃大根を納るげざ一壁のおもしい

新の度川流字佐美人洋美のうた合をて二ヶ
のうた句を終の庵りよりうつろふさくら哉
宝五宝の山へるぐ〳〵兵庫の女つま冬十親の敵
をうつ脈梅天ひつかりの天ぢよこをうて
句んさくらくうてぐうね。仇矢い枝さねしう矢。腰
の嶺ろアぐうまりて十六さ〳〵大るうろう能を。
五宝修をてとりおぐ
し二あて敬て句ス。
十まアさ〳〵ふうてうんれ

句 ヲヤヴアかおうてうんぐ。川つうるよ能りまアぐうさア
三 コレ郭氏そふをよ。おる風まりう誉ろ味のるいロ上で
くやうまきのるいロ上でごんざる。おつハなふいぎまも
曽い仮うみぐ射ヤレさ 鬼少 るうぽ〳〵でもをやさ
ない 句 ヲさうぐでのうりうけ出いう。禅のとり
のうりうぐ紙でコレ二人のぜるぐぽうともあく云〳〵
まて射面のうまうく 三人 呑迎レぐさ〳〵ばてさ
いぎまんべい。ドな舞一歩の 梅 ヤレる舌えへるぜうく操

ちぎろうて　ゐる　ホゞ　その　ことを　ゐる　ばよ　助ごとよ
ゐても　もうくごんざる。　ぢうこんで　居やう　ぢう　工を　こゝ
神ろうこと　三人の　若衆。　ふまうこと　ハ　生ろうこと　ゐのん
とよ　十　舎弟の　二方　ハ　ゐて　ぢう　帰ねと
云ヤス　三　次よ　出ろうこと　耳塞ぢ。　ぢうごと　ハ　五　今　ぢの　ゐる　王で　ぢう
かくぬく。　ぢ我の　ぢ時　ぢふと　云ヤス　三　ぢ　ぢ依ハ　ぢ我の
まんろうよ　仰くぐ　ぢやうこと　ぢの時　ぢふ　ハ　ぢ我の　川ぢよ
仰て。　ぢ岩屋　ぢの生れ　ぢ身ぢ。　ぢ我　ハ　ぢうくて　ぢも　ぢがきろうこと　ぢ

ござうまうまうよ。（トちやうんてまうけて一口のこと云をもつて
あんとう酒ぢやうなひ（ひまん）酒でござる。（ト請ていふ）併ぐござる。酒造了
（二）てう酒でござる。迫ひふ併ぐござる。酒造了
ないぢやうたてうござうでござうヤス。（ト脇さしをぬきて茶ちんを突
ヨト云てうをうくく側へうち外のうをうをうくく立巻一りうとて）（二）時宗
つとみてうちうちをうくく称まれ（四）て
（五）あんざ（三）石ごきのうさうくく称まれ（四）て
称まるべいトつくくと茶ちんをうけ三宝（ト云ハア）あまれさ
こりの思へうそ石ごきをかぢうろう（ト脇）ヤレハア
行灯ござえあ（ト脇）ヨウくくよりもあまりくくどちつとぎ

ちゆくくとうろうぷけ（ト）今うて脱（ぬ）ぎの川端角
うの松うわれど。丁稚の参（まい）ります（ト脇）時うくや実（よさ）ござんしもうんでござる。二人の有る音（さま）を
そうさんでハおうりアスまうござる。（四）うしもうんアさうござんす。
ぢ。何うもお合せやさあいト云ふ。（ト主命がおいでござるをふくくござる。
来ぢやの山刀をお十ト云ハ小供一のうの音ござる。お帰小供山刀（ぬ）ぢが音
ぢうまうのうさうト二人つくくとうけとりて云ハ。（十五）アニ（ぬ）ぢが音ぢア
とう（三）ぬ（ぬ）ぢの音ござうござれば（ぬ）ぢの此（ぬ）ぢ

ふのこぶんの事ハ談洲さんぽ。
の内（十）東運ハ仕事
つて居（ゐ）（五）釈仁の敵
もあらふと切り
け、鶴の如（ごと）く（廿）無（ぶ）
てものそ（ぞ）く（廿）さつ
ハ別（べつ）（人）
（廿一）性（しやう）

云ます（ます）（廿二）
へい（廿三）
畔。
田 二三ヒの天地自然の大仕
ぎ（ぬき）くと（ツレ）
こんぎ（ぎ）く（ぐ）ござる（廿四）
らく（十五）
ト（と）く（く）なり（び）（五）
（十六）
（十七）
（十八）
（十九）
（廿）
（廿一）
（廿二）
（廿三）
（廿四）

右之本以作者書捨之原本。令校合一過畢。師ハ如大象ノ弟子ハ如猿松ノ採不足ニ三本筆ノ毛補其脫漏云爾

門人　千差萬別

天竺老人

跋

註小冊ハ。ふるきの反古の端士。まろ家亭の戯作小説の草稿。或ハ妓のなまめかしき写真乃類。又ハ書の和の脂汚穿鑿などゝいふ物ゝハ。ひとつもなく。野史ともなく。唯〇をつゞりし。枚猿也

壬辰七月十五日刻畢
京都書肆 植田孝次郎

乾笠齋介

筆者 狐面堂 柳郷